

審 査 結 果 の 要 旨

氏 名 瀧 本 禎 之

本研究は、有病者が増加しており社会的に注目されている摂食障害患者の突然死への不整脈の関わりを明らかにするため、電気生理学的手法を用いて摂食障害患者の substrate の評価を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 摂食障害患者を対象に、体表面十二誘導心電図から測定された QT interval, QT dispersion を健常者と比較検討した。対象者を電解質正常者に限定し、心拍数による影響を nomogram 法, Bazget 式にて補正した後も、神経性食欲不振症(AN)、神経性大食症(BN)患者共に、QT interval が延長、QT dispersion が増大していた。電解質異常や徐脈の影響を除外したのち、正常体重を有する BN 患者でも QT interval, QT dispersion が延長していたことから、摂食障害患者の QT interval 延長, QT dispersion 増大は単なる低栄養状態によるものではないことが示唆された。
2. 摂食障害患者の QT interval, QT dispersion と栄養状態を示す body mass index (BMI), 体重の変化率との相関を比較検討した。AN 患者では有意な相関は認められなかったが、BN 患者では体重の変化率が QT interval, QT dispersion と有意な相関を示していた。これは、BN 患者においては、体重の変化自体が自律神経系を介して再分極過程に影響を与えて QT interval, QT dispersion を変化させていることを、示唆するものであった。
3. 摂食障害患者を心理テストの気分プロフィール調査表(POMS)の点数によって高得点・低得点の二群にわけて、QT interval, QT dispersion を比較検討した。AN 患者では各心理指標の高・低得点群間で差はみられなかったが、BN 患者においては、anxiety と depression の高得点群が低得点群と比較して、それぞれ QT interval が延長、QT dispersion が増大していた。また、BN 患者の anxiety と depression の高得点群と低得点群の間で、栄養状態を示す BMI に差は見られなかった。このことから、BN 患者においては、anxiety や depression といった心理状態がおそらく自律神経系のトーンス変化を通じて、QT interval や QT dispersion に影響を与えていることが示唆された。
4. 摂食障害患者の QT interval, QT dispersion と POMS の各心理指標との相関を検討した。結果、AN 患者では有意な相関は認められなかったが、BN 患者では depression

の得点が QT interval, QT dispersion と有意な相関を示していた。これは、BN 患者においては、様々な心理状態のなかでも特に depression の心理状態が自律神経系を変化させ、その結果 QT interval, QT dispersion に影響を与えていることを、示唆するものであった。

5. 摂食障害患者を対象に、加算平均心電図を施行し、遅延電位(LP)陽性の割合を健常者と比較検討した。AN 患者においては LP 陽性者の割合は健常者と差が認められなかったが、BN 患者においては LP 陽性者の割合が健常者と比較して有意に増加していた。また、BN 患者を AN の既往歴の有無にて二群にわけて検討すると、AN 歴のある BN 患者において、LP 陽性者が有意に増加していた。AN 歴のある BN 患者では、LP の存在によって伝導異常をきたしやす状態であることが示唆された。

以上、本論文は摂食障害患者を対象に、不整脈の substrate の指標である QT interval, QT dispersion, LP を検討することによって、摂食障害患者に substrate が存在している可能性を明らかにした。本研究は摂食障害患者が不整脈発生に関係した電気的不安定性を有していることを示唆するものであり、摂食障害患者の治療において重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。